

最後のアナログ言語調査資料:危機に瀕した言語データの発掘と救出

加藤 重広 (北海道大学) *
 中川 裕 (東京外国語大学) *
 加藤 幹治 (東京外国語大学)
 木村 公彦 (東京外国語大学)
 塩原 朝子 (東京外国語大学) *
 米田 信子 (大阪大学) *
 (*は司会を, *はコメンテーターを兼ねる)

本ワークショップでは、退職などで研究職を離れた言語学者（や隣接領域たる人類学・民俗学などの研究者）が所有する現地調査資料を散逸させずに有効に活用できるようにするには、何が必要かを探り、実際の取組例を紹介しつつ、私たちに何ができるかを考えたい。それは、いわば「言語学における持続可能性」を考えることにもなる。貴重な言語データが散逸する前に、提供を受け、適切な管理をすることで今後利活用可能なデータとして保存していくシステムを構築することが重要であることは改めて主張するまでもないだろう。

いま消滅の危機にある、これらのデータは、概ね平成の間に退職時期を迎えた 80 歳代から 60 歳代の研究者が所有しているものである。半世紀程度前の貴重な言語データも多く、中には今後は入手不可能なものも多い。もちろん、そのなかには危機言語のデータも含まれ、危機言語でなくとも、半世紀前のデータとしての価値も高い。これらを保存管理し、再資源化するには、当然のことながら、アナログデータを適切にデジタル化し、データの全体像が把握できる能力、かつ、持続可能な体制が必要である。以上のことについて、参加者で認識を深めることを目的とする。

言語研究者は研究費と時間を確保できればフィールドに行くことは容易だとこれまで考えてきた。しかし、パンデミックの世界では、海外はおろか国内でもフィールドに赴くことが難しい。研究職を離れた言語学者のデータを活用できれば、現地調査ができない間に研究を停滞させるのではなく、研究上の新しい展開や見方、ヒントを得る可能性もある。具体例を紹介しつつ、議論したい。登壇者とテーマは下記の通り。

- | | |
|----------------------------------|---------------|
| 1) 「なぜいま言語データの救出が必要か」 (全体趣旨) | 加藤重広 |
| 2) 「デジタル化とアーカイブ化の実相：コイサンと琉球の事例」 | 加藤幹治 |
| 3) 「データのアーカイブからできること：発掘的研究の可能性」 | 木村公彦 |
| 4) 「土田データ：台湾原住民危機言語・方言のデータ」 | 塩原朝子 |
| 5) 「湯川データ：120 を超えるバントゥ諸語の並行的データ」 | 米田信子 |
| 6) 「菅原データ：初のコイサン自然会話コーパス」 | 中川裕・加藤幹治・木村公彦 |
| 7) 「全体討論」 | 全員 |

本ワークショップは、基盤研究(B)(一般)「研究職を離れた言語研究者が保持する言語データの適正再資源化のための基盤確立研究」(18H00661)の研究成果の一部である。